

学 会 名

第31回日本慢性期医療学会
(2023年10月19日～20日)

研究テーマ

誤嚥性肺炎を繰り返す高齢患者へのエンドオブライフ・ケア
～摂食嚥下支援チームで「食いたい」を支える～

病 院 名

医療法人社団健育会 石巻健育会病院

演 者

○渡邊大地子(看護師)
高橋聡美(言語聴覚士)岩渕聖也(言語聴覚士)鈴木敦史(管理栄養士)

概 要

【はじめに】

誤嚥性肺炎を繰り返し経口摂取が困難な高齢患者から、「食いたい」という強い希望があった。
先行期から咽頭期全ての期の障害が考えられたが、摂食嚥下支援チームが介入し、患者の好む味を活用した訓練を中心に援助した。
終末期を迎える患者の「食いたい」希望を最期まで支えるエンドオブライフ・ケアを提供できた事例を報告する。

【事例紹介】

80歳代後半、女性
現病歴：特別養護老人ホームに入所していた。
3回目の誤嚥性肺炎の治療および経口摂取評価のため、当院地域包括ケア病棟に入院となる。
既往歴：腰椎圧迫骨折、誤嚥性肺炎、認知症
入院時の状態：身長150cm、体重31.5kg、BMI13.5痩せ、JCSⅡ-10～20、禁食・末梢点滴施行
入院時病状説明：嚥下評価は行うが経口摂取は難しい状態で末梢点滴を継続する。拘縮予防のリハビリを行う。急変時は延命処置は行わない。

【倫理的配慮】

症例をまとめるにあたり、患者個人を特定するような表現はしないことを、患者・家族へ口頭で説明し同意を得た。

【経過】

入院時は先行期～咽頭期、全ての期の障害が考えられ、禁食、看取りの方針であった。しかし入院後、末梢点滴施行により全身状態が改善、「食いたい」と頻回に訴えるようになった。
経口摂取再開には多職種での評価が必要と考え、16病日目、摂食嚥下支援チームが介入し、嚥下評価でゼリーでの直接訓練が可能となった。主治医から経口摂取再開の許可はあったが、誤嚥徴候により、たびたび経口摂取は中断された。
その後、51病日目には断続的な酸素投与など全身状態悪化が見られたが、「食いたい」希望はずっと続いていた。そのため、チーム介入時に呼吸状態の悪化がないことを確認し、患者が好む甘酒味をつけたアイスマッサージなどの間接訓練を継続することとした。担当の言語聴覚士による訓練は亡くなる10日前まで実施することができた。
157病日目、永眠。家族より「食べる援助を続けてもらい、この病院で良かった」との言葉をいただいた。

【考察】

繰り返す誤嚥性肺炎の患者の場合、咽頭期の障害が改善せず、経口摂取を希望しても現実的には叶えられないことが多い。今回、誤嚥リスクが高かったが、患者の「食いたい」意志が明確であったことから、摂食嚥下支援チームで介入し、経口摂取が再開できた。チームカンファレンスにより患者の希望に添えるような訓練の方法を見出したことが、患者のエンドオブライフ・ケアとして「食いたい」を支えることができたと考える。